

事例  
2

引きこもった中学生への支援

背景や要因

経済的困窮  
家庭の養育力不足

1 気になる状況

相談内容

中学1年生女子  
家庭との連絡がなかなか取れない

経緯と現状

父親と本人の二人で暮らしている。  
小学校入学当初より不登校傾向があった。小学2年生の時にSSWrが関わり、両親及び本人とつながることができた。教育委員会とSSWrの粘り強い取り組みにより、小学校高学年時には、少しずつ登校できるようになったが、母親の病死後また不登校になってしまった。  
中学校入学からは一日も登校できていない。連絡が取れない状態が続き、本人の安否確認もできない。

学校

SSWrを  
要請

SSWr

- 本人が小学生の時に関わっていたので面識があった。父親との信頼関係も築けていたので、再び家庭訪問をしても受け入れてくれると思われた。そこで、学校職員の家庭訪問に同行し、学校と家庭の橋渡しをしていこうと考えた。
- 父親の収入についても心配されるので、福祉部局とも連携していこうと考えた。

SSWr

学校にケース会議開催を提案

- 参加者の選定について助言
- 会議にも参加し、過去の状態について情報伝達

2 ケース会議

アセスメント（課題の背景や要因の見立て）

本人について (生育歴、学校や家庭の様子など)	家族について (保護者・兄弟姉妹等の状況など)	その他 (経済状況、地域社会との関係、家庭の様子など)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小学生の時から不登校であり、友達もいない。</li> <li>● 学校での生活体験が少ないので、他人との関わり方が分からないなど、社会性が身に付いていない。</li> <li>● 家庭訪問をしても担任と会わない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小学校高学年時に母親が病死し、現在は、本人、父親の二人で生活している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 父親の収入で生活しているが、父親の仕事は不定期であり、安定した収入が得られていない。</li> <li>● 死亡した母親の両親が同じ地区内に住んでおり、本人が遊びに行くことがある。</li> </ul>

考えられる背景要因

- 母親の死亡に伴い、家庭の養育力がさらに低下していると考えられる。
- 基本的な生活習慣が乱れていると考えられる。

現在行っている学校の対応

- 担任、学年主任 …… 週一回程度の家庭訪問や電話連絡をしている。
- 教頭 …… 教育委員会に状況を報告している。

プランニング①（課題解決に向けた目標の設定）

長期的な目標

- 別室登校を含め、学校に通うことができる。
- 規則正しい生活ができる。

短期的な目標

- 決まった時間に起床、就寝することができる。
- 決まった時間に朝食が取れる。
- 父親に見送られ、自分で適応指導教室に通うことができる。

家庭の養育力が低く、小学生の時にも不登校であった子どもの事案です。本人が小学2年生の時に一度関わっており、その時は登校ができるようになりました。しかし、母親の病死をきっかけに本人が引きこもってしまいました。その時、学校から再び要請を受け、関わるようになりました。

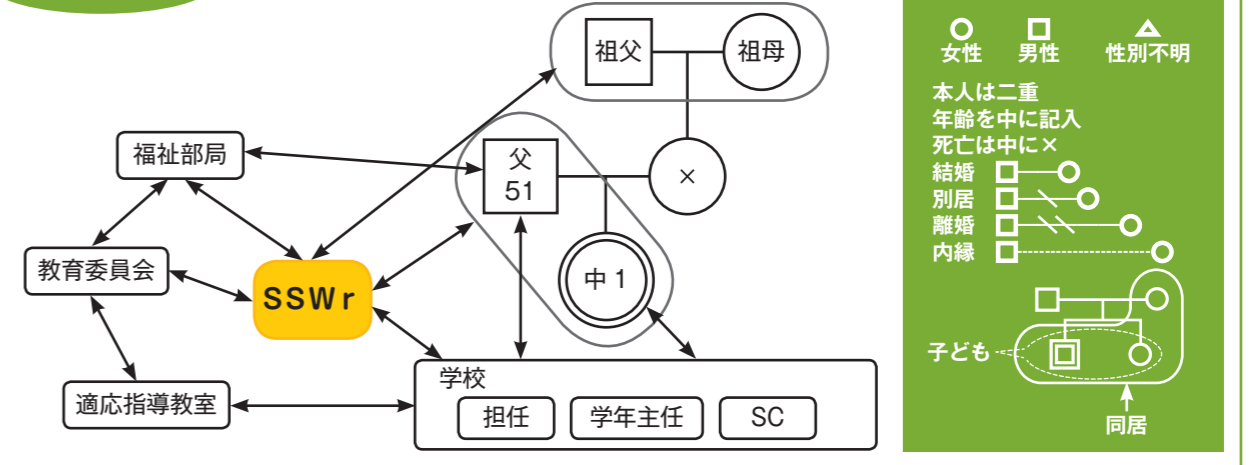
まず、ケース会議を開くよう助言し、関係機関も含めて情報を共有し、支援方針を明確にしました。私は家庭訪問を再開しました。家庭訪問を継続する中で適応指導教室の話を本人にしたところ関心を示したので、父親、本人と一緒に適応指導教室の見学に行きました。その後、本人は通級し始め、休むことなく通っています。関係者もあまりの変わりように驚いていますが、本人は何かのきっかけを待っていたようです。

本人が興味を示したときに行動に移せたことが成果につながったと感じています。



SSWr

エコマップ



プランニング②  
(具体的な手立てと役割分担の決定)

担任・学年主任

- 本人、父親と定期的な連絡を取り、可能であれば、今後の方針について話をする。

SC

- 本人、父親の了承が得られれば、担任の家庭訪問に同行し、カウンセリングを行う。

教育委員会

- 適応指導教室の受け入れ体制を整える。

福祉部局

- 家庭生活が安定するように、父親に対して就労に関するアドバイスを行う。

SSWr

- 担任が家庭訪問をするときに同行し、担任と本人及び父親との橋渡しをする。また、独自での家庭訪問も行い、本人には機会を捉えて適応指導教室についての情報を提供する。父親へは、生活のリズムを整えるようお願いする。

3 その後の状況

- 適応指導教室への通級が始まり、ほぼ休まずに通うことができています。
- 別室ではあるが、週に一回程度、学校にも通うことができるようになった。
- 父親への働きかけにより、本人は決まった時間に起きて朝食を取るなど、規則正しい生活ができるようになった。
- 福祉部局の助言により、父親は定職に就くことができた。
- 父親の仕事が忙しい時には、祖父母に面倒を見てもらっている。